

2022. 4. 10 (日) ヨハネ13:12~17

13:12 イエスは彼らの足を洗うと、上着を着て再び席に着き、彼らに言われた。「わたしがあなたがたに何をしたのか分かりますか。

13:13 あなたがたはわたしを『先生』とか『主』とか呼んでいます。そう言うのは正しいことです。そのとおりなのですから。

13:14 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。

13:16 まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりません。

13:17 これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。

<説教>

今週は受難週です。

私たちの主イエス・キリストが、罪深い私たちの罪を負ってくださり、私たちのために十字架で死なれ、私たちの代わりに神の怒り、さばきを受けてくださいました。

そして墓に葬られて三日目に死人の中からよみがえられました。

このイエス・キリストを、自分の救い主、人生の主と信じる私たちは、神の怒りとさばきを免れて、イエス・キリストにあるよみがえりのいのち、永遠のいのちを頂くのです。

十字架の死とよみがえりの主イエス・キリストを特に覚えて主を礼拝するイースターまでの今週も、このイエス・キリストを私たちに与えてくださった神に感謝して、神を愛し、人を愛し、神に仕え、人に仕えて生きたいと願います。

イエスが十字架で死なれる日の夜、「最後の晩餐」の時にイエスが弟子たちの足をお洗いになった「洗足」のこと、そしてそのときイエスが弟子たちにお教えになったことを使徒ヨハネは記しています。

先主日に見たように、イエスの「洗足」が指し示していることは、イエスの十字架の血による弟子たちの罪の洗い清めでした。

まずイエスがペテロ（弟子たち）の汚い足を水で洗ってきれいにしてくださるように、まずイエスがこの後すぐペテロたちの罪の洗いきよめのために十字架で血を流して下さるということでした。

そして、そのようにまずイエスが弟子たちに仕えてくださること、まず弟子たちがイエスに信頼して感謝してイエスに仕えていただくこと、そこにイエスと弟子たちの正しい関係がある、ということでした。

そのことを弟子たちは後で分かるようになるのですが、イエスがこの「洗足」のみわざによって弟子たちに教えようとなさったことが更にありました。

それは、イエスの弟子たち（私たち）が主イエスのしもべとして、互いに仕え合わなければならないということです。

〈主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです（から）。〉(13:14-15)とイエスは言われました。

イエスが言われたこと私たちは既に聞いて来ました。

〈そこで、イエスは彼らを呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています。あなたがたの間では、そうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべになりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようになさい。〉(マタイ 20:26-28) 〈あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。〉(同 23:11)

本当の意味で〈一番偉い者〉は〈皆に仕える者〉です。

〈皆に仕える〉ということが正しく〈人々の上に権力をふる〉うということです。

〈権力〉とは〈皆に仕える〉ためのものなのです。

ですから〈天においても地においても、すべての権威が与えられ〉(マタイ 28:18)るイエスも徹底的にひたすら「仕える」生涯をお送りになりました。

もちろんまずご自分の父なる神に対して全く従順にお仕えになりましたが、同時に人々にお仕えになりました。

子どもの時はナザレで〈両親に仕えられ〉(ルカ 2:51)、公生涯に入られてからは行く先々で悪霊を追い出し、病人をいやし、死人をよみがえらせ、ときには男だけで五千人・四千人の人々の給食をなさり、人々に神の国の福音を伝えて「仕え」ました。

またペテロの姑をいやしたり、湖で波風を静めて弟子たちを助けもなされ、いつも真理のみことばを語って教え戒め、「最後の晩餐」で弟子たちの足を洗い「仕え」ました。

そしてついには十字架で死なれて弟子たち、イエスを信じる者の罪を贖われました。

そのように誰よりも一番人々にお仕えになったイエスが「最後の晩餐」の席で弟子たちに、イエスがしたとおりに弟子たちもするようにと〈模範を示したのです〉。

〈模範を示した〉の〈示した〉は、「与えた」という言葉ですから、私たちは〈主であり、師である〉イエスから、人に仕える〈模範〉すなわち「手本、見本、実例」を「受けた」のです。

それは外から眺めて「すごい、さすがです」と関心して終わることとしてではなく、確かに〈それを行う〉(17)べきこととして主イエスから与えられたことを信仰によって受けるのです(イエスにある救いを信仰によって受けるのと同じように)。

〈主であり、師である〉イエスにまず仕えて頂いて生かされている、〈主〉のしもべ、〈師〉の弟子である私たちにイエスがお命じになり、願っておられることは私たちが互いに仕え合うことです。

主イエスのご自分の〈しもべ〉である私たちに、つまり牧師に、教会役員に、教会学校教師に、そして信徒一人一人に、「仕える」者となることを願い、命じておられます。

〈まことに、まことに、あなたがたに言います。しもべは主人にまさらず、遣わされた

者は遣わした者にまさりません。〉(16)とイエスは言われます。

私たちの〈主〉(主人)であるイエスが、その〈しもべ〉である私たちに、ご自身の生涯をかけて徹底的に完全に仕えてくださいました。

そして今も、私たちのために御父にとりなし、私たちに仕えてくださっています。

ですから、主の〈しもべ〉である私たちがたとえ生涯、死ぬまで、全力を尽くし最善を尽くして人に仕え、互いに仕え合ったとしても、それでもイエスの〈模範〉には到底、遙かに及びません(ですから「仕え過ぎるのでは」という心配はまず不要でしょう)。

それどころか、逆に私たちの肉の本心・本音は「人になんか仕えたくない。人から仕えてほしい。」ということです(それはいかにも偉そうに威張るといふ形をとる場合もあれば逆にいかにも謙遜にという形をとる場合もあるでしょう)。

しかし〈これらのことが分かっているなら、そして、それを行うなら、あなたがたは幸いです。〉(17)とイエスは言われます。

これは「これらのことをわたしがあなたに分からせ、それを行わせてあげます。そういう幸いな者にわたしがしてあげます。」というイエスの約束であり、信仰の招きなのです。

